

多次元共感性尺度作成の試み¹⁾

Key words : 共感性, 対人的反応性, 社会的望ましさ, 援助規範意識

鈴木有美²⁾ 木野和代²⁾ 出口智子²⁾
遠山孝司²⁾ 出口拓彦²⁾ 伊田勝憲³⁾
大谷福子³⁾ 谷口ゆき³⁾ 野田勝子²⁾

【問題と目的】

人間は社会的な動物であるといわれているように (e.g., Aronson, 1972), 生活の上で他者との関わりは必要不可欠なものである。そして我々は、その関わりの中で他者の思考や感情を理解しようしたり、その結果何らかの気持ちや考えを抱いたりするということを日常的に行なっている。その反応の一つが共感である。「共感性 (Empathy)」という概念は、Wispé (1986) によれば、Lipps (1903) がギリシャ語の *empatheia* [“in” (en) + “suffering” (pathos)] から提唱した「感情移入 (Einfühlung)」が、Tichener (1909) によりドイツ語から英語に翻訳され心理学用語として定着したといわれている。以来、これまでの研究において様々な定義がなされているが、大別すれば「他者の心理状態を正確に判断する認知能力」という認知的理解の側面を強調する定義と「他者の心理状態に対する代理的な情動反応」という情動的反応の側面を強調する定義がある。

従来の研究ではこれに沿って、認知能力もしくは情緒反応のどちらかに焦点をあてた研究がなされており、また、それぞれの定義に基づいた共感性を測定する指標も開発されている。例えば、Hogan (1969) の the Empathy Scale は認知的側面を重視した定義に沿った尺度としてよく知られている。情動的側面を強調する定義に基づくものとしては、Mehrabian & Epstein (1972) による the Questionnaire Measure of Emotional Empathy (QMEE) が挙げられる。これらは、それぞれ尺度としての妥当性が確かめられているが、両尺度の

相関は低く、両者は共感性の別々の側面を測定するものである (Chlopan, McCain, Carbonell, & Hagen, 1985)。これに対して、近年では両側面を統合して共感性を捉える必要性が指摘されており、また、一次元的に捉えられることの多かったその構造についても、多次元的に捉え直そうとする試みがなされている (e.g., Davis, 1980, 1983a, 1983b; 久保, 1982)。

Davis (1980) は、このような多次元的アプローチに基づき、共感性の測度として対人的反応性指標 (the Interpersonal Reactivity Index: IRI) を作成し、いくつかの社会生活に重要と思われる特性との関連について検討を行なっている。IRI は、4つの下位概念、すなわち認知的側面の「視点取得」「想像性」と、情動的側面の「共感的配慮」「個人的苦痛」から成る多次元的な尺度である。視点取得とは、日常生活において他者の視点に立とうとする傾向を意味する。想像性は、架空の人物の感情や行動に自分自身をあてはめる傾向を表す。これらの認知的側面については、その傾向の強い者ほど他者の立場に立ちやすく、その結果他者の心理状態について正しく理解できると考えられる。情動的側面については、自己の代理的な情動反応を、同情のような他者指向的なもの（共感的配慮）と不安のような自己指向的なもの（個人的苦痛）に区別している。共感的配慮は、他者に対して暖かい感情を持ったり配慮する傾向を意味する。個人的苦痛は、他者の感情への反応として自分が不快な感情を抱く傾向を表す。

Davis (1983a) によれば、視点取得は Hogan (1969) の the Empathy Scale と正の相関をもち、個人的苦痛は負の相関をもつ。さらに、想像性と共感的配慮は、QMEE と正の相関を持つことも示し、IRI が多次元的な共感性尺度であることを証明している。この尺度は、共感性を認知・情動の両側面から捉えようとした点で評価できよう。しかし、これら4つの側面は決して全ての対人反応を網羅するものではないと Davis も述べており、共感性の他の側面を捉え得る構成要素が存在

1) 本研究は、東海心理学会第49回大会において発表された内容に加筆・修正したものである。

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）

3) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（前期課程）

多次元共感性尺度作成の試み

する可能性は否定できない。また、IRIの個人的苦痛は、事故や突発の出来事など、人というよりはむしろ一般的な事象を対象として測定する項目によって主に構成されており、尺度作成の際に仮定されていたような共感的配慮との対応関係が保たれているとは言い難い。そのため、より包括的に共感性を測定し、また対応する下位概念を等質的に測定し得るような尺度が必要であると考えられる。

現在では、共感性は同情や妬みといった必ずしも他者とは一致しない情緒的経験までを含む幅広い概念として捉えられている。同情は、これまで共感と最も関連の深い概念としてどのように区別するかという議論がなされてきたが (e. g., Wispe, 1986), Gruen & Mendelsohn (1986) は、同情を共感と共に測定しない限りこれらの違いを明確にするとはできないと主張している。さらに、認知的側面についても、発達的な側面から共感性の研究を進めている Hoffman (1982) は、洞察力以外の認知の役割として、役割取得能力の重要性を挙げている。この役割取得については、先に述べた視点取得と同一視されている概念である。そして、他者の立場に立った自己を通してその人の視点や役割を想定するこの能力には、自己と他者の心理状態を区別し正しくラベリングする能力や、他者の心理状態を直接的・象徴的に示す手がかりから過去に同様の経験をしたという自己の記憶に結び付ける能力が必要であるとしている。

以上の点から、共感性は、他者の心理状態へ意識を向けることに始まり、推測・判断の結果何らかの情緒的経験へ至るまでの一連の過程と捉えることが最も適切と考えられる。したがって、本研究では共感性を『他者のポジティブおよびネガティブな経験（感情、欲求、知覚、思考、態度などの心理状態）について、推測から理解を経て反応へ至る心的傾向および認知能力』と定義する。そして、先行研究において焦点づけられてきた、「他者へ向けられる意識の増加」「他者の心理状態についての認知的・社会的な洞察およびその正確さ」「知覚された他者の心理状態に対する代理的な情緒反応および共有」などをその特徴とする。これまでの研究では、共感の対象は情動状態に絞られることが多かったが、広義には情動状態だけでなく知覚や思考など幅広い心理状態が含まれるため、本研究では広く“心理状態”を共感の対象として想定することとする。

これまで日本においても、共感性測定のための尺度がいくつか提案されてきたが、これらは海外において作成された尺度を翻訳したもののがほとんどである。例えば、上述の IRI は桜井 (1988) によって、QMEE は加藤・高木 (1980) により、また Bryant (1982) が作成した

児童用 QMEE は桜井 (1986) によって、それぞれ日本語版が作成されている。しかし、これらの日本語版尺度を用いて行われた研究結果は、元の尺度による研究結果と必ずしも整合するものではない（桜井, 1988）。また、日本人を測定の対象とする場合、文化的背景などから内容的に必ずしも適当とは思われない項目が含まれている可能性もある。したがって、異なる文化圏・言語圏で作成された尺度をそのまま適用することには限界があるため、海外の尺度を邦訳して使用するのではなく、それらの知見を踏まえた独自の尺度の開発が望まれよう。

共感する、あるいは共感できるということは、社会生活において円滑な人間関係を築いたり維持したりするために重要なことである。特に、青年の友人や家族との対人関係が希薄化していることが指摘されつつある現在、青年期における共感性について調査を進めることが急務であるといえよう。したがって本研究では、先行研究を参考に認知・情緒両側面について共感性の下位概念（構成要素）を想定し、青年の共感性を多次元的に測定する尺度—多次元共感性尺度 (the Multidimensional Empathy Scale : MES)—の作成を試みる。なお、共感性を測定するにあたっては、状態としての共感性（ある特定の状況における共感）と人格特性としての共感性（共感しやすいという一般的な気質）に大別されるが、本研究では、後者的人格特性としての共感性を測定する尺度作成を目的とする。

多次元的な共感性の下位概念を仮定するにあたって、まず第一に、認知的側面の構成要素として、① “他者心理への関心”（他者の心理状態に対する能動的敏感性や意志）、② “社会的感受性”（他者の心理状態を推測する際の正確さ）、③ “想像性”（IRIの想像性に対応）、④ “自他弁別能力”（自己と他者の心理状態を区別する能力）、⑤ “自他連関能力”（他者の心理状態と過去に同様の経験をしたという自己の記憶を結びつける能力）、⑥ “視点取得（役割取得）能力”（IRI の視点取得に対応）が想定される。

第二に、情緒的側面としては、「他者の心理状態に対する感受性（受動的敏感性・被影響性）」と「他者の心理状態に対する情緒反応傾向」が仮定される。さらに、情緒反応傾向については指向性（自己指向的・他者指向的）と同一性（心理状態の一致・不一致）によってより細かく分類され得る。したがって、⑦ “被影響性”（心的特性としての感受性・受動的敏感性）、⑧ “自己指向的情緒反応傾向”，⑨ “他者指向的情緒反応傾向”，⑩ “自己指向的共感傾向”，⑪ “他者指向的共感傾向”を情緒的側面の構成要素として想定する。

なお、“自己指向的情緒反応傾向”および“他者指向

的反応傾向”は、両者とも共有する心理状態が他者のそれと一致しない応答的な情緒反応傾向である。すなわち、他者の情緒的経験に対する反応として別の感情を抱くようなものである。前者は Davis (1980) の個人的苦痛に類似した構成要素であるが、他者のネガティブな心理状態に対する自己指向的な反応だけでなく、ポジティブな心理状態に対する自己指向的な反応も含むものである。これに対して、後者は Davis の共感的配慮に類似した構成要素であるが、同情のような他者のネガティブな心理状態に対する他者指向的な反応だけでなく、ポジティブな心理状態に対する他者指向的な反応も含むものである。さらに、“自己指向的共感傾向”および“他者指向的共感傾向”は、両者とも共有する心理状態が他者のそれと一致する並行的な情緒反応傾向である。すなわち、両者は他者のポジティブまたはネガティブな心理状態を引き起こした原因を他者と共有し、他者と同じ心理状態を持つに至るという点で同じ反応であるが、その反応がより自己に焦点づけられたものであるか、他者に焦点づけられたものであるかという点で異なる。

本研究では共感性の構成要素として、以上11要素を仮定し、各要素の定義に沿って尺度項目を作成していく。なお、既存の共感性尺度には動物への共感に関する項目を含むものがあるが、そのような項目では動物好きな者とそうでない者の反応に差が生じる可能性があるため、共感の対象は人間の心理状態に限定する。また、対象となる他者にどの程度好意を持っているかによっても、反応が変わってくることが予想されるため、項目作成に際して「自己と他者の関係性（親しさ）」も考慮することとする。

また、本研究で作成される MES の妥当性を検討するために、以下の 3 つの既存尺度を用いることとした。既述の Davis (1980) による IRI を菊池 (1999) が日本語に訳したもの、Crowne & Marlowe (1960) による「社会的望ましさ尺度 (the Social Desirability Scale: SDS)」を北村・鈴木 (1986) が日本語に訳したもの、そして箱井・高木 (1987) による「援助規範意識尺度 (the Helping Norm Scale: HNS)」の 3 つである。

IRI は共感性を測定する指標として一般的に広く用いられているものである。先に述べたようにこの尺度には、視点取得、想像性、共感的配慮、個人的苦痛といった 4 つの側面が含まれている。本研究で作成された MES とは、関連する下位尺度間において相関が高いことが望まれる。

SDS は、社会的に望ましい方向に回答を歪める傾向を測定する尺度である。この尺度の得点が高い者は、社会的に承認されたいという欲求が強く、このような者か

ら得られた回答は現実の姿を反映していない恐れがある。共感性の質問紙測定における社会的望ましさの影響は度々問題視されており (e.g., 斎藤, 1997; 桜井, 1986), MES で得点が高くて、SDS の得点も高い場合には、その回答者が本当に共感性が高いのかが疑わしくなるため、この 2 つの尺度間には有意な相関がないことが望まれる。

HNS は、援助に関する規範意識の強さの程度を測定する尺度である。この尺度には、返済規範（他者の援助や好意に対して報いるべきであるといった規範意識）、自己犠牲規範（自分のことは後回しにしても他者を助けるべきであるといった規範意識）、交換規範（援助に見返りを期待し、自分に有利になるような援助なら行うべきであるといった規範意識）、弱者救済規範（自分より弱い立場の人が困っているなら助けるべきであるといった規範意識）の 4 つの側面が含まれており、人はこれらの援助規範に基づいて援助行動をとるといわれている。共感性は、向社会的行動もしくは援助行動を媒介する重要な要因とみなされているが (e.g., Eisenberg & Miller, 1987; Davis, 1983b; Mehrabian & Epstein, 1972; Unger & Thumuluri, 1997), 鈴木 (1992) は共感性と援助行動との関連が一貫していないことを指摘し、これは共感性が援助を準備する人格的傾向であるのに対して、援助行動は実際の行動レベルであるためだと述べている。したがって、実際の援助行動ではなく援助規範意識を取り上げ、MES と相関の高いことを予想して本研究に組み込むこととする。

【方 法】

被調査者

四年制大学、短期大学、専門学校に通う学生 765 名（男性 247 名、女性 517 名、性別不明 1 名）に対して調査を行った。年齢の範囲は、16 歳から 59 歳であったが（年齢不明者 4 名。平均年齢 = 20.5 歳、SD = 3.69 歳）、今回は青年を対象にした共感性尺度の作成を目的としたため、分析には 30 歳未満の被調査者の回答のみを扱った。最終的に分析に用いられたのは 735 名分の回答であった（平均年齢 = 20.0 歳、SD = 2.21 歳）。

手続き

質問紙調査を実施した。質問紙は、フェイス・シート、MES、妥当性検討のための既存尺度（IRI、SDS、HNS）で構成されていた。ただし、各質問紙に載せられた既存尺度は上記 3 種類の内のいずれかであった。つまり、本来ならば 3 尺度全てについて回答を求めるべきであったが、1 人の被調査者が MES を含めた 4 尺度に

多次元共感性尺度作成の試み

回答することの負担を考慮し、本研究では MES と既存尺度の内の一つの組み合わせにより、3 版の質問紙を用意した。各調査対象者は 3 版の質問紙の内のいずれかに回答した。

調査は授業時間の一部を利用して行われた場合と、個別に質問紙を配布して行われた場合があった。調査を行う際には、3 種類の質問紙ができるだけ均等になるよう配布された（内訳：IRI を含む質問紙に回答した男性 77 名、女性 166 名。SDS を含む質問紙に回答した男性 82 名、女性 163 名。HNS を含む質問紙に回答した男性 80 名、女性 167 名）。その際、MES の作成を目的としていることは教示せず、「青年の対人関係に関する調査」として説明し、回答後、被調査者の要請に応じてデブリーフィングを行った。全ての回答は、1999 年 7 月に収集された。回答に要した時間は 15 分から 30 分程度であった。

質問紙

共感性尺度については、本研究において想定された上述の 11 の下位概念をもとに、まず約 300 の質問項目が用意された。これらの項目の内容について、なるべく各下位概念を幅広く測定し得るように、また、下位概念間で項目数に大きな偏りがないように配慮して項目選択を行った。最終的に 85 項目を選択し、質問内容を変えない程度に表現や言い回しを一部修正して全体的な調整を図った（Table 1 参照）。

MES、IRI、SDS の各質問に対する回答は「全くあてはまらない（1）」から「非常によくあてはまる（5）」までの 5 段階評定により求められた。SDS は本来「はい」「いいえ」という回答形式であるが、本研究では他の尺度と統一し、5 段階評定で回答を求めた。HNS に関しては、「非常に反対する（1）」から「非常に賛成する（5）」までの 5 段階評定により回答が求められた。

【結果と考察】

MES の構成

項目分析について Dawis (2000) は、I-T 相関の結果や得点の高低群比較といった内的整合性を最大にするような、Likert 尺度が開発されて以来多く行なわれている従来の項目選択法に代わって、最近では因子分析やクラスター分析によって項目選択を行う研究が増えていることを指摘している。因子分析による項目選択は、標本の大きさや因子解・回転法などの問題を伴うものの、本研究のように理論に沿って測度の拡張を図り、次元性の段階から探索的に検討を試みる尺度作成の場合には、特に有効な方法であると思われる。その上で、信頼性検討の際に I-T 相関の結果から内的整合性を（妥当性に大

きく影響を与えない程度に）最大限にする努力をすれば、実質的には従来の項目選択法と同じ分析をすることとなる。したがって、本研究においても因子分析によってまず因子構造の検討を行い、その後内的整合性の観点から項目分析を行った。

MES の 85 項目に関して、主成分法による因子分析を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から、6 因子解を採用し、promax 回転を行った（Table 1）。因子分析の結果、いずれかの因子に対する因子負荷量の絶対値が .40 以上であることを基準に（i.e., 各因子に対する因子負荷量の絶対値がいずれも .40 未満であった項目と、複数の因子に対する因子負荷量の絶対値が .40 以上の項目を除いて）、54 項目を選択した。

選択された項目内容から抽出された各因子の解釈を行ったところ、第 1 因子は「まわりに困っている人がいても気にならない（逆転項目）」をはじめとする 15 項目から成っており、他者の心的状態について他者に焦点づけられた情緒反応を示す内容が多く含まれていたため、「他者指向的情緒反応」と命名された。第 2 因子は「他人が何をして欲しいかすぐ察知できる」などの 11 項目で構成されており、他者の心理状態を正確に把握する能力に関わる因子と考えられ、「他者心理の理解力」と命名された。第 3 因子は「まわりの人がそうだといえば、自分もそうだと思えてくる」をはじめとする 9 項目から成っており、他者の感情や態度、あるいは流行からの影響の受けやすさを意味すると考えられ、「被影響性」と命名された。第 4 因子は「見知らぬ人が嬉しそうにしているのを見ただけで、自分も嬉しくなる」などの 11 項目で構成されており、他者の心的状態について自己に焦点づけられた情緒反応を示す内容が多く含まれていたため、「自己指向的情緒反応」と命名された。第 5 因子は「人の気持ちを正確に判断することは、難しいことだ」などの 3 項目から成っており、他者の心的状態に対する自己の態度に関わる因子と考えられ、「対人的情緒に対する態度」と命名された。第 6 因子は「空想するのは現実的ではないのであまりしない（逆転項目）」をはじめとする、架空の出来事を想像する傾向に関する 5 項目から構成されていたため、「想像性」と命名された。

以上のように、「他者指向的情緒反応（MES 1）」「被影響性（MES 3）」「自己指向的情緒反応（MES 4）」は情緒的側面を、また、「他者心理の理解力（MES 2）」「対人的情緒に対する態度（MES 5）」「想像性（MES 6）」は認知的側面を表す因子と考えられる。ただし、各下位尺度について α 係数を算出した結果（Table 2 参照）、第 5 因子は α 係数が .60 に達しておらず、信頼性の観点からその後の分析には用いないこととした。その他の因

Table 1 多次元共感性尺度の項目および因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	F4	F6
<第1因子 他者指向的情緒反応>						
72 *まわりに困っている人がいても気にならない。	0.71	0.09	0.07	0.00	-0.26	0.01
45 *他人に不幸なことが起こっても、自分に直接関係なければ気にしない。	0.67	0.08	-0.01	-0.08	0.08	0.07
77 *人が苦しんでいても、自分はどう感じるということもない。	0.64	0.09	0.04	-0.07	-0.08	-0.09
71 *他人の気持ちについて考えることは時間の無駄である。	0.63	0.08	0.06	0.09	-0.33	-0.13
27 *他人が失敗しても同情することはない。	0.62	0.13	-0.02	0.05	-0.08	-0.01
32 *喜んでいる人を見ても、あまり祝ってあげようとは思わない。	0.60	0.05	0.13	-0.10	0.04	-0.04
37 *他人が何を考えていても、私には関係のことだ。	0.54	0.01	-0.21	0.04	-0.09	0.04
14 *悩んでいる友達がいても、その悩みを分かち合うことができない。	0.52	-0.28	0.01	0.06	0.08	0.11
17 人が頑張っているのを見たり聞いたりすると、自分には関係なくとも応援したくなる。	-0.50	-0.06	-0.05	0.21	0.02	0.10
33 *周囲の考え方方に合わせてものを考えることができない。	0.49	-0.22	-0.14	0.23	0.04	0.16
40 *喜んでいる人を見ていても、その人と同じような気持ちにはならない。	0.48	0.02	-0.04	-0.24	0.25	-0.16
20 *他人の気持ちにあまり関心がない。	0.48	-0.07	-0.27	0.01	-0.26	0.02
81 *友人が喜んでいても、一緒に喜んであげられないことがある。	0.46	0.02	0.15	0.07	0.24	0.01
11 *人につられて泣きたくなってしまっても、それはあくまで他人事としてみることができる。	0.45	0.08	-0.19	0.05	0.26	-0.23
23 悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる。	-0.45	0.06	0.14	0.19	0.05	0.01
38 友人が悩んでいると、その原因について考える。	-0.38	0.13	0.08	0.22	0.22	-0.09
4 *まわりに悲しんでいる人がいても、自分で悲しくなることはない。	0.38	0.04	-0.12	-0.15	0.12	-0.12
7 家を追われる難民は気の毒である。	-0.37	-0.08	0.03	-0.08	0.28	0.09
34 *人の気持ちなど他人がわかることではない。	0.35	-0.32	-0.09	0.04	0.28	0.08
58 友達が喜んでいるのを見ると安心する。	-0.34	-0.14	-0.11	0.33	0.16	0.06
50 自分に何かいいことがあっても、まわりにいる人間が不幸だと素直に喜べない。	-0.33	-0.02	0.15	0.24	0.06	-0.14
9 *人の話を聞いても、自分の経験や体験を思い出すことはない。	0.31	-0.07	-0.04	0.08	-0.18	-0.18
<第2因子 他者心理の理解力>						
49 他人が何をして欲しいかすぐ察知できる。	0.22	0.78	-0.05	0.08	-0.02	0.01
36 他人の考え方を理解するのが比較的得意だ。	0.10	0.70	-0.12	0.04	0.00	0.04
21 他の人が今どのような気持ちかが、その人の様子やしぐさからわかる。	0.15	0.69	-0.07	-0.02	0.00	0.10
48 人の心の動きに敏感である。	0.04	0.68	0.05	-0.03	0.17	0.02
60 相手がどう感じているかを自分も同じように感じることができる。	0.08	0.64	0.02	0.24	-0.13	-0.02
47 *周囲に悩んでいる人がいても、気づかないことが多い。	0.20	-0.57	0.11	0.22	0.03	-0.06
13 人の気持ちを理解するのに苦労することはない。	0.15	0.53	-0.09	0.02	-0.21	-0.02
82 自分は、友人のことはよく知っている。	-0.08	0.49	0.19	-0.05	-0.23	-0.02
57 *友人がどう考えているかについて勘違いすることが多い。	0.11	-0.46	0.17	0.40	0.11	-0.08
59 周囲に喜んでいる人がいれば、すぐに気づくことができる。	-0.05	0.42	-0.02	0.13	0.14	0.13
52 私は思いやりのある人間だ。	-0.17	0.40	0.16	-0.03	-0.07	-0.08
8 常に人の立場に立って、相手を理解するようにしている。	-0.29	0.33	-0.09	0.19	0.15	-0.20
1 自分の今までの経験や体験をもとにして、他人の気持ちを推測することがある。	0.04	0.33	-0.06	0.09	0.31	0.15
69 *病気で不安になっている友達の気持ちを、共有してあげるのは難しい。	0.13	-0.27	-0.01	0.01	0.24	-0.05
<第3因子 被影響性>						
67 まわりの人がそうだといえば、自分もそうだと思えてくる。	-0.05	-0.02	0.65	0.18	-0.17	-0.07
29 *自分の信念や意見は、友人の意見によって左右されることはない。	0.05	0.13	-0.62	0.03	0.08	0.00
12 物事を自分一人で決めるのが苦手だ。	-0.02	-0.13	0.61	-0.03	-0.03	-0.12
85 *他人の感情に流されてしまうことはない。	0.17	0.15	-0.56	-0.02	-0.04	-0.07
3 流行に流れやすい。	-0.03	0.16	0.56	-0.07	-0.13	0.01
68 人が何を考えているのか、気になることが多い。	-0.13	0.07	0.51	0.02	0.38	-0.03
24 自分の感情は周囲の人の影響を受けやすい。	0.03	-0.06	0.50	0.16	0.06	0.08
79 *人が何かを欲しがっているのを見ても、自分は欲しくならない。	-0.02	-0.04	-0.47	0.01	0.16	0.00
46 他の人の願いがかなうと、自分もかなえればいいのにと思う。	0.04	0.10	0.45	-0.16	0.20	0.24
80 まわりの人の心境をいつも知りたいと思う。	0.01	0.13	0.43	0.12	0.41	-0.07
28 *人の話を聞くときは、その人が何を言いたいのかを考えながら話を聞く。	-0.19	0.16	-0.39	0.15	0.37	-0.06
10 人の意見をいつの間にか自分が考えたことのように思ってしまいがちだ。	0.24	-0.04	0.38	0.37	0.06	0.03
73 人の意見を聞いているとき、それが自分の意見と同じであると思うことが多い。	0.01	0.11	0.33	0.31	-0.15	-0.05
78 周囲の人が笑っているのを見ると、なぜ笑っているのかを知りたくなる。	0.08	0.06	0.32	0.16	0.31	0.07
5 *イライラしている人がそばにいても、自分は平静でいられる。	-0.02	0.08	-0.24	-0.08	0.04	-0.21

多次元共感性尺度作成の試み

<第4因子 自己指向的情緒反応>							
61 自分が嬉しいのか相手が嬉しいのか、わからなくなってくることがある。	0.18	-0.02	0.16	0.50	-0.12	-0.04	
31 見知らぬ人が嬉しそうにしているのを見ただけで、自分も嬉しくなる。	-0.16	-0.04	-0.10	0.49	-0.18	0.20	
22 喜んでいる人を見ていると、自分が嬉しかった時のことがよみがえってくる。	-0.05	0.18	-0.01	0.46	-0.26	0.25	
53 喜んでいる人がいれば、親しい人ではなくても、喜びを分かち合いたいと思う。	-0.28	-0.04	-0.04	0.45	-0.14	0.12	
74 友達が困っていると、まるで自分が困っているような気がしてくる。	-0.16	-0.03	0.16	0.45	-0.07	0.08	
19 人と一緒に映画やテレビなどを見ているとき、その人がどのような感想を持つかが気になる。	0.25	0.10	0.09	0.44	0.18	0.03	
44 苦しんでいる人を見ると、それが自分の嫌いな人であっても、その人の苦しさを感じ取ろうとする。	-0.34	0.00	-0.19	0.44	-0.06	-0.17	
30 苦しんでいる人を見ると、以前、自分が苦しんでいた時のことを思い出す。	-0.06	0.07	-0.10	0.41	-0.05	0.25	
83 他人が怪我をして痛がっているのを見ると、自分も痛いような気になることが多い。	-0.05	-0.03	0.06	0.41	-0.11	0.16	
56 自分が落ち込んでいるときでも、他人の喜びを理解できる。	-0.15	0.07	-0.29	0.40	-0.02	-0.04	
43 自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかをわからうとする。	-0.08	0.10	-0.35	0.40	0.24	-0.05	
66 まわりが楽しそうだと自分まで楽しくなってくる。	-0.30	-0.04	0.00	0.38	-0.11	0.08	
2 自分を他人に置き換えて想像してみたりすることが多い。	0.11	0.26	0.04	0.36	0.21	0.00	
25 *「相手の立場も考えなさい」と言われることがある。	0.35	-0.21	0.02	0.36	-0.06	0.06	
15 まわりの人が落ち込んでいると、なんとなく不快になる。	0.06	-0.12	0.15	0.33	-0.01	-0.03	
42 悲しんでいる人を見ていると、重苦しい気分になる。	-0.10	-0.09	0.15	0.32	0.16	0.09	
84 人と対立しても、相手の立場に立てば、お互いわかり合えると思う。	-0.15	0.16	-0.01	0.30	0.08	-0.17	
26 人が緊張していると自分も緊張してくる。	-0.06	-0.05	0.28	0.30	-0.02	-0.17	
35 自分のことをお節介だと思う。	-0.11	0.07	0.15	0.27	0.04	-0.12	
54 空腹な友人を見るとかわいそうだと思う。	-0.20	0.00	0.02	0.24	-0.09	0.00	
<第5因子 対人的情緒に対する態度>							
75 自分が感じることを他人も感じるとは限らない。	-0.05	-0.15	-0.22	-0.18	0.60	0.06	
76 人の気持ちを正確に判断することは、難しいことだ。	-0.20	-0.34	-0.08	-0.06	0.55	0.06	
41 人と付き合ううえで、相手がどんな気分でいるのかを知ることは大切だ。	-0.32	0.04	0.14	-0.09	0.48	0.04	
65 他人の欲求と自分の欲求は別のものだ。	0.22	0.02	-0.15	-0.12	0.37	0.06	
6 人に話をするとときは、相手の立場に立って、その人がわかるように考えながら話をした方がよいと思う。	-0.34	-0.01	-0.14	0.05	0.36	-0.04	
62 相手によって同情する程度は変わる。	0.29	0.12	0.15	-0.19	0.33	0.25	
<第6因子 想像性>							
51 *空想するのは現実的ではないのであまりしない。	0.00	0.10	0.06	0.07	-0.28	-0.67	
55 空想することが好きだ。	0.09	-0.06	-0.08	0.08	0.24	0.66	
16 映画や本の主人公とともに、喜んだり悲しんだりする。	-0.07	0.14	0.05	0.05	-0.01	0.59	
39 感動的な映画を見た後は、その余韻にいつまでも浸ってしまう。	-0.06	0.11	0.14	0.04	0.01	0.54	
70 *小説の中の出来事が、自分のことのように感じることはない。	0.00	-0.01	0.00	-0.17	0.08	-0.53	
64 *映画や小説の登場人物の気持ちの変化についていけないことがよくある。	0.20	-0.22	0.12	0.26	0.01	-0.39	
18 他人に現在起こっていることを、自分が過去に経験したことと重ね合わせて、嬉しいったり悲しくなりたりする。	-0.10	0.12	0.01	0.33	0.01	0.34	
63 人の話や経験を見聞きして心を動かされることが多い。	-0.14	0.00	0.27	0.12	0.14	0.28	
因子間相関		F 2	F 3	F 4	F 5	F 6	
		F 1	-0.36	-0.10	-0.04	-0.03	-0.33
		F 2		-0.02	0.23	0.17	0.14
		F 3			0.22	0.12	0.17
		F 4				0.13	0.26
		F 5					0.07

*逆転項目

子については、項目を削除することで α 係数の向上を図る可能性も示されたが、各因子が表す下位概念の幅(i.e., 妥当性)および各因子を構成する項目数のバランスを考慮し、I-T相関の結果による項目削除は行わないこととした。なお、下位尺度得点は、下位尺度間の比較を容易にするため、それぞれを構成する項目の評定値の合計点を各下位尺度を構成する項目の数で除算し、それらの平均値と標準偏差を α 係数と共にTable 2に示した。

MESに関する因子分析の結果、認知的側面、情緒的

側面それぞれに関わる構成要素が見出されたが、各内容に関しては、想定していた構成要素全てが確かめられたわけではない。例えば、他者の心理状態に対する情緒反応傾向は、指向性と同一性により4種類に分類されるのではないかと考え、それぞれに対して項目を作成したが、分析の結果“他者指向的情緒反応(MES1)”と“自己指向的情緒反応(MES4)”の2因子に大きく分かれた。これにより、被調査者は、他者の心理状態に対する情緒反応が他者に焦点づけられたものか自己に焦点づけられたものかについて識別しているものの、理論

Table 2 下位尺度得点の平均値、標準偏差および α 係数

	M	SD	α
MES 1 他者指向的情緒反応	3.61	0.54	0.86
MES 2 他者心理の理解力	3.08	0.55	0.82
MES 3 被影響性	3.32	0.64	0.77
MES 4 自己指向的情緒反応	2.91	0.59	0.76
MES 5 対人的情緒に対する態度	4.40	0.51	0.51
MES 6 想像性	3.75	0.76	0.75
IRI 1 想像性	3.28	0.84	0.83
IRI 2 視点取得	3.06	0.63	0.67
IRI 3 共感的配慮	3.59	0.51	0.68
IRI 4 個人的苦痛	3.39	0.54	0.57
SDS 社会的望ましさ	2.69	0.38	0.78
HNS 1 返済規範	3.49	0.51	0.75
HNS 2 自己犠牲規範	3.22	0.51	0.75
HNS 3 交換規範	3.20	0.54	0.46
HNS 4 弱者救済規範	3.42	0.45	0.70

上は弁別可能な同一性については、実際には自己の情緒反応がその対象である他者の心理状態と同一であるかどうかを識別していないことが示唆された。これは、他者の心理状態に対する情緒反応傾向を共感的配慮と個人的苦痛に大別している IRI と同様の結果となる。ただし、問題と目的において指摘した通り、IRI の個人的苦痛は他者というよりはむしろ事象を対象とした情緒反応を測定し、また、ネガティブな心理状態しか扱っておらず、共感的配慮との対応関係に疑問があるため MES の自己指向的情緒反応とは構成内容を異にする。加えて MES では、本研究において新たに考慮された被影響性が独自の因子として抽出されており、共感性の情緒的側面をより包括的に捉えているといえよう。

認知的側面に関しては、IRI と同様に想像性は抽出されたものの、視点取得は見出されず、その他の他者の心理状態を推測する際の認知的能力に関わる因子は“他者

心理の理解力 (MES 2)”のみという結果となった。他者の心理状態を正確に認知する能力は、もちろん重要な要因であり、古くから共感性の中心的要素として注目されてきたものである。しかし現在では、他者の立場に立った自己を通してその他者の視点や役割を想定する視点取得または役割取得能力といった認知的側面は、それ以上に共感性の主要な要因と位置づけられてきており、向社会的行動もしくは援助行動といった愛的行動を予測するための鍵と見なされている。MES の適用可能性の観点からも、項目内容や下位概念間の関係について更なる検討が必要であろう⁴⁾。

各下位尺度間の関係については (Table 3 参照)、“他者心理の理解力 (MES 2)”と“被影響性 (MES 3)”が無相関であった以外は有意な正の相関が認められた。したがって、共感性の認知的側面と情緒的側面には密接な関連があると考えられる。ただし、共感性における他者心理を理解する認知能力は、他者の心理状態に対して能動的ではない、受動的な敏感性または被影響性といった情緒的側面とはあまり関連はないが、共感的な情緒反応をするためには必要であることが示唆される。

妥当性の検討

まず、それぞれの既存尺度 (IRI, SDS, HNS) について、それぞれの尺度における下位尺度構成にしたがい、下位尺度得点の平均値、標準偏差、 α 係数を算出した (Table 2 参照)。ここでも MES の場合と同じく、

- 4) この点について更なる検討を加えて MES の改良を試み、女子青年を対象とした測定結果においては、視点取得を測定する因子が見出されている。この改訂版については、木野・鈴木・速水 (2000) を参照されたい。

Table 3 下位尺度間相関

	MES 1	MES 2	MES 3	MES 4	MES 6	IRI 1	IRI 2	HNS 1	HNS 2
MES 1 他者指向的情緒反応									
MES 2 他者心理の理解力	0.31 **								
MES 3 被影響性	0.22 **	-0.07							
MES 4 自己指向的情緒反応	0.55 **	0.24 **	0.20 **						
MES 5 想像性	0.38 **	0.16 **	0.23 **	0.04 **					
IRI 1 想像性	0.32 **	0.015 *	0.20 **	0.43 **	0.79 **				
IRI 2 視点取得	0.24 **	0.32 **	-0.08	0.35 **	0.12	0.16 *			
IRI 3 共感的配慮	0.66 **	0.36 **	0.23 **	0.51 **	0.43 **	0.41 **	0.32 **		
SDS 社会的望ましさ	0.29 **	0.24 **	-0.32 **	0.27 **	-0.10				
HNS 1 返済規範	0.27 **	0.11	0.17 **	0.21 **	0.26 **				
HNS 2 自己犠牲規範	0.58 **	0.13 *	0.08	0.41 **	0.23 **			0.32 **	
HNS 4 弱者救済規範	0.36 **	0.10	0.15 *	0.35 **	0.26 **			0.55 **	0.40 **

** p < .01 * p < .05

多次元共感性尺度作成の試み

α 係数が .60 に達していない IRI の “個人的苦痛 (IRI 4)” と HNS の “交換規範 (HNS 3)” についてはその後の分析の対象外とした。下位尺度得点については、MES と同様に、それぞれを構成する項目の評定値の合計点を各下位尺度を構成する項目の数で除算することによって求められた。MES と 3 尺度の下位尺度間相関は Table 3 に示されている。

MES と既存尺度 IRI との関係については、“想像性 (MES 6)” と “想像性 (IRI 1)” の間と、“他者指向的情緒反応 (MES 1)” と “共感的配慮 (IRI 3)” の間に比較的高い正の相関が認められた。これらは、それぞれ両因子の意味内容が類似しているためであり、このことから、本研究で作成された共感性尺度が既存尺度における対応概念と同様の心的特性を測定していることが確認されたといえよう。

さらに、“想像性 (MES 6)” と “想像性 (IRI 1)” は、MES の “想像性 (MES 6)” 以外の下位尺度との間で非常に類似した相関のパターンを示した。同様に、“他者指向的情緒反応 (MES 1)” と “共感的配慮 (IRI 3)” についても、MES の “他者指向的情緒反応 (MES 1)” 以外の下位尺度との相関のパターンが非常に類似しており、このことも MES が既存尺度における対応概念と同様の心的特性を測定しているということを示唆している。

次に、MES と SDS との関係については、“想像性 (MES 6)” とは有意な相関が見られなかった。その他の因子とは有意な相関を示したが、“被影響性 (MES 3)” を除けば相関係数の絶対値が .30 を超えることはなかった。有意な相関を示したことは予測に反したものであるが、考察は注意深く行なわれるべきである。この結果から、単純に MES が反応傾向としての社会的望ましさを包含してしまっていると結論づけるのは、この SDS の問題点を考慮する限り早計であるように思われるからである。

今回用いた SDS は、Crowne & Marlowe (1960) がそれまでの社会的望ましさの尺度の問題点を指摘し、さらに精神障害の症状に起因すると考えられる要因を排除して作成した尺度を、北村・鈴木 (1986) が邦訳したものである。しかし北村・鈴木は、やはりいくつかの項目において、精神障害を持つ群と持たない群の間で有意差が認められるという調査結果を報告しており、また、回答の反応率が項目間で大きく異なることから、この尺度を構成している 33 項目が、同質あるいは同程度の反応傾向を測定していないのではないかと指摘している。さらに、この尺度は大体において年齢や性差を超えて類似の反応が得られるものの、未成年者に不適切な項目が含まれているという指摘も、考慮されるべき問題点である。

う。例えば、「選挙の時は、すべての立候補者について十分に研究します (項目 1)」という項目は、まだ選挙権を持たない被調査者には不適切であるし、「ガスの元栓と戸締まりを確認せずに長期の旅行に出ることなど決してありません (項目 27)」という項目では、自宅からの通学生か、あるいは下宿生かという居住形態の違いによって、回答が著しく異なる可能性がある。本研究では妥当性検討の基準として元の尺度をそのまま用いたため、全ての項目を含めて検討を行なったが、このような項目を除いた形での検討も併せて行なわれるべきかもしれない。

さらに、この SDS が社会的な承認欲求のために回答を歪めるといった反応傾向を測定しているのか、あるいは本当に社会的に望ましいとされる人格を測定しているのか明らかでないという問題も残されている。この点について撫尾 (1973) は、主に Edwards (1957) の社会的望ましさ尺度について言及しているが、それ以来この問題が未だ解決していないように思われるからである。もし本研究で採用した SDS についても同様のことが言えるならば、当然のことながら現在社会的に望ましいと認知されている共感性との関連が高いという傾向を示すであろう。実際、Eisenberg, Miller, Schaller, Fabes, Fultz, Shell, & Shea (1989) によれば、IRI の共感的配慮と SDS の間には $r = .39$ ($p < .01$) の相関が示されている。したがって、SDS の各項目を細かく検討し、そのような人格特性としての社会的望ましさを測定していると思われる項目を排除した上で、分析を進める必要があるのではないだろうか。

最後に、MES と HNS との関係については、“他者指向的情緒反応 (MES 1)” と “自己犠牲規範 (HNS 2)” の間に比較的高い正の相関が認められた。この “自己犠牲規範 (HNS 2)” は、援助行動の動機の中でも特に愛他心に関わる規範意識を表しているとされている。そのため、互恵的・補償的な規範意識を測る “返済規範 (HNS 1)” や、相手の立場に依存する “弱者救済規範 (HNS 4)” などよりもやや関連が深かったのであろう。信頼性の点から今回分析に含めなかった “交換規範 (HNS 3)” は、利己的な規範意識を表しているとされていたため、この因子についても検討することができれば、さらに有益な情報が得られたかもしれない。

【討 論】

本研究では、共感性を多次元的に捉え、これまでの理論に沿って既存尺度よりも幅広く概念を網羅するような尺度の作成を試みた。分析の結果、想定していた構成要素のいくつかは見出され、既存尺度との対応関係も確

認されたが、他の因子に吸収されてしまったものもあった。Embretson (1983) は、構成概念妥当性を「概念的代表適切性 (construct representation)」と「法則的範囲 (nomothetic span)」の2側面から考察している。この概念的代表適切性とは、焦点となる概念の定義が尺度項目の内容や形式に十分反映されているかどうかの程度を表すものである。今回この内容的妥当性を部分的にしか確認しておらず、今後さらに各因子の内容について詳細な吟味と分析を重ね、各構成要素を十分に代表するような項目を再検討し、尺度を洗練していく必要がある。他方、法則的範囲とは、その概念と他の概念との関連が十分に吟味され支持されているかどうかの程度を表すものである。本研究では、社会的望ましさと援助規範意識を取り上げ検討を行ったが、その結果、収束的妥当性についても弁別的妥当性についても満足する結果が得られたとは言い難い。

この点に関しては、今回作成された MES についてさらに安定的な因子構造を有する尺度作成への努力はもちろんあるが、本研究で扱った以外の概念との関連についても今後調べていく必要があると思われる。標準 (standard) となる既存尺度や、基準 (criterion) となる関連概念の測度の選択は難しい問題ではあるが (Austin & Villanova, 1992 参照)、新たな尺度を評価していく上で避けて通ることの出来ない難問といえる。

また、共感性については、男女差が見られることも指摘されており、今後は男女別の分析を行っていくことも、よりよい尺度構成のために必要であろう。なお、今回は青年期に焦点をあて共感性尺度の作成を試みたが、他の年齢層との比較を行うことや発達的な視点から縦断的にデータを検討していくことも、共感性の本質について理解を深めるために有効であると思われる。新たなデータを収集し、再検査法や折半法による安定性の観点からの信頼性の検討や、交差妥当性の検討 (cross-validation) を進めていくことで、これらの点が明らかとなり、延いては尺度の実用可能性もしくは適用可能性を高めることに繋がると期待される。

引用文献

- Aronson, E. 1972 *The social animal*. San Francisco, CA: W. H. Freeman.
- Austin, J. T., & Villanova, P. 1992 The criterion problem: 1917-1992. *Journal of Applied Psychology*, 77, 836-874.
- Bryant, B. K. 1982 An index of empathy for

- children and adolescents. *Child Development*, 53, 413-425.
- Chlopan, B. E., McCain, M. L., Carbonell, J. L., & Hagen, R. L. 1985 Empathy: Review of available measures. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 635-653.
- Crowne, D. P., & Marlowe, D. 1960 A new scale of social desirability independent of psychopathology. *Journal of Consulting Psychology*, 24, 349-354.
- Davis, M. H. 1980 A multidimensional approach to individual differences in empathy. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, 10, 85.
- Davis, M. H. 1983a Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- Davis, M. H. 1983b The effects of dispositional empathy on emotional reactions and helping: A multidimensional approach. *Journal of Personality*, 51, 167-184.
- Davis, M. H. 菊池章夫(訳) 1999 共感の社会心理学: 人間関係の基礎 川島書店
(Davis, M. H. 1994 Empathy: A social psychological approach.)
- Dawis, R. V. 2000 Scale construction and psychometric considerations. In H. E. A. Tinsley & S. D. Brown (Eds.), *Handbook of applied multivariate statistics and mathematical modeling*. San Diego, CA: Academic Press.
- Edwards, A. L. 1957 *The social desirability variable in personality assessment and research*. New York: Dryden.
- Eisenberg, N., & Miller, P. A. 1987 The relation of empathy to prosocial and related behaviors. *Psychological Bulletin*, 101, 91-119.
- Eisenberg, N., Miller P. A., Schaller M., Fabes R. A., Fultz J., Shell R. and Shea C. L. 1989 The role of sympathy and altruistic personality traits in helping: A reexamination. *Journal of personality*, 57, 41-67.
- Embretson, S. 1983 Construct validity: Construct representation versus nomothetic span. *Psychological Bulletin*, 93, 179-197.
- Gruen, R. J., & Mendelsohn, G. 1986 Emotional

多次元共感性尺度作成の試み

- responses to affective displays in others: The distinction between empathy and sympathy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 609-614.
- 箱井英寿・高木修 1987 援助規範意識の性別、年代、および、世代間の比較 *社会心理学研究*, 3, 39-47.
- Hoffman, M. L. 1982 Development of prosocial motivation: Empathy and guilt. In N. Eisenberg (Ed.), *The development of prosocial behavior*. New York: Academic Press.
- Hogan, R. 1969 Development of an empathy scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 33, 307-316.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における情動的共感性の特質 *筑波大学心理学研究*, 2, 33-42.
- 木野和代・鈴木有美・速水敏彦 2000 友人の不快感情調整に関する要因の検討－女子青年を対象に－ *名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）*, 47, 59-68.
- 北村俊則・鈴木忠治 1986 日本語版 Social Desirability Scale について *社会精神医学*, 9, 173-180.
- 久保ゆかり 1982 人の気持の理解過程についての理論的検討 *東京大学教育学部紀要*, 22, 203-209.
- Mehrabian, A., & Epstein, N. 1972 A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, 40, 525-543.
- 斎藤耕二 1997 青年期における共感性の発達(1) *白百合女子大学研究紀要*, 33, 177-188.
- 桜井茂男 1986 児童における共感と向社会的行動の関係 *教育心理学研究*, 34, 342-346.
- 桜井茂男 1988 大学生における共感と援助行動の関係－多次元共感測定尺度を用いて－ *奈良教育大学紀要*, 37, 149-154.
- 鈴木隆子 1992 向社会的行動に影響する諸要因－共感性・社会的スキル・外向性－ *実験社会心理学研究*, 32, 71-84.
- Unger, L. S., & Thumuluri, L. K. 1997 Trait empathy and continuous helping: The case of voluntarism. *Journal of Social Behavior and Personality*, 12, 785-800.
- 撫尾知信 1973 Social Desirability と Social Desirability 尺度 *心理学評論*, 16, 209-227.
- Wispé 1986 The distinction between sympathy and empathy: To call forth a concept, a word is needed. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 314-321.

(2000年9月16日 受稿)

ABSTRACT

A measure of empathy:

A multidimensional approach to the structure and measurement of trait empathy

Yumi SUZUKI, Kazuyo KINO, Tomoko DEGUCHI, Takashi TOHYAMA, Takuhiko DEGUCHI,
Katsunori IDA, Fukuko OHTANI, Yuki TANIGUCHI, and Katsuko NODA

The past studies in empathy have indicated that empathy is an important aspect of interpersonal behavior and moral conduct, as well as a motivator for prosocial and/or altruistic behavior. In recent years, it has been growing movement toward an understanding of empathy as a multidimensional construct, and accordingly a more comprehensive index of empathy that includes both emotional and cognitive aspects in a multidimensional fashion has become necessary.

The present study presents the development and validation of a measure of trait empathy for use with adolescents. The Multidimensional Empathy Scale (MES) was developed and administered to 735 adolescents, and its relationships with measures of interpersonal reactivity, social desirability, and helping norm were assessed.

A principal components analysis of the MES was performed to determine the underlying structure, and it yielded six interpretable factors: Other-oriented affective reactivity, Competence to others' mental states, Susceptibility to others' mental states, Self-oriented affective reactivity, Attitudes to interpersonal affects, and Fantasy. The findings supported in general the reliability and validity of the MES, but several limitations of the scale and issues for future research were also discussed.

Key words: empathy, interpersonal reactivity, social desirability, helping norm